

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H04432

研究課題名(和文) ボルネオ島カヤン諸族の言語活動にみるインドシナ諸言語・文化の影響

研究課題名(英文) Influence of Indochinese languages and cultures upon the linguistic activities of Kayanic peoples in Borneo Island

研究代表者

奥島 美夏 (Okushima, Mika)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：10337751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,400,000円

研究成果の概要(和文)：カリマンタン(ボルネオ)島のカヤン系言語諸族は、従来分類されてきたオーストロネシア語族の語彙だけでなく、モン・クメール(オーストロアジア)語族の語彙も多数使用しており、後者の語彙は基礎語彙だけでなく、農耕儀礼の祈禱・歌や先祖の叙事詩などにもみられることがわかった。一部の語彙は両語族の語彙が併用されていた。また、モン・クメール系語彙の本来の意味を説明する言説もあり、それが実際にインドシナ半島で今日も使われていた。暫定的結論として、カヤン諸族のモン・クメール系語彙はバナー、ヴェト、モンなどの語派と類似した語が最も多いが、その他の語派の語彙もみられ、頻繁な交易取引や移住があったことが推測される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究ではマレーシアのモーゲンやベトナムのチャム、インドネシアのアチェなどの民族にオーストロネシア語族とモン・クメール語族の語彙がみられることが知られてきたが、ボルネオ島のカヤン系言語諸族の言語についてはほぼ何も知られてこなかった。今回、カヤン系諸族の言語と伝承の分析から、インドシナ半島と東南アジア島嶼部をつなぐ新たな言語伝播・民族移動のルートがあった可能性が示された。今後も、サラワク(マレーシア)側のカヤン諸族や関連近隣民族の補足調査を継続し、さらなる民族移動・混交の過程を明らかにするための基盤が確立された。

研究成果の概要(英文)：Unlike the preliminary studies, Kayanic peoples of Borneo Island (Kayan, Bahau, Ga'ay etc.) speak not only Austronesian words but also Mon-Khmeric (Austroasiatic) words. Many of their Mon-Khmeric words are close to that of Bahnaric, Vietic, and Monic branches, but sometimes also Pearic, Katic, Khmuic, and Nicobaric branches. Moreover, a part of their Mon-Khmeric words, are combined with the Austronesian ones of the same meaning, but used in different contexts.

Some of the Mon-Khmeric words among the Kayanic peoples are still explained with its original meaning or context. For example, Kayanic word 'old' came from Mon-Khmeric word 'gray, silver (of hair)'. A part of the Kayanic peoples still remember the original meaning is 'white, silver (of hair)' to suggest honorably old persons.

As provisional conclusion, Kayanic peoples engaged long time in trades with those of Indochina. Also, part of them migrated from Indochina and became the inhabitants of Borneo.

研究分野：文化人類学

キーワード：東南アジア両岸交流 言語活動 ボルネオ少数民族 オーストロネシア語族 モン・クメール語族

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代からの考古学、言語学、文化人類学などの共同研究により、オーストロネシア語族の民族移動や物質文化などの研究が進み、東南アジア大陸部のモン・クメール(オーストロアジア)語族の影響も受けたチャム系諸族(ジャライ、ラデ、ラグライを含む)、オラン・アスリ、モーケン(モクレン)などの研究分析が蓄積されつつある。だが、同じくモン・クメール的な語彙や文化を持つボルネオ(カリマンタン)島のカヤン諸族(カヤン、バハウ、ガアイなどのカヤン系言語諸族)についてはほとんど言及されてこなかった。

## 2. 研究の目的

上記の理由から、従来オーストロネシア語族に分類されてきたカヤン諸族の語彙・文化を、モン・クメール語族のそれと比較分析し、東南アジア大陸部・島嶼部間の人の移動や文化交流を把握する一助とした。

## 3. 研究の方法

研究メンバーは長年カヤン諸族やモン・クメール語族の調査を行い、現地語にも長じている。今回はまず各フィールドの概要や特徴を紹介し合い、次にモン・クメール語族の言語学研究(Jenny and Sidwell 2014)を輪読して基礎をおさえ、各自収集した基礎語彙(スワデシュ語彙リスト 200~250語)およびいくつかの特定語彙群(身体部位、動物、色など)を比較分析した。その際、オーストロアジア語族・オーストロネシア語族の辞書検索サイト Sidwell and Cooper 2009 や Blust and Trussel 2020 なども活用した。また、クメール語派の担当者が研究代表者・分担者になかったため、中野惟文氏(東北大学大学院博士課程)を研究協力者として研究会に招聘した。

さらには、その結果をふまえて現地調査も行う予定だったが、新型コロナ禍により2020年・2021年度はオンライン取材などのみにとどまり、2022年・2023年度(2023年度は期間延長による)にインドネシア、マレーシア、ラオスで限定的に調査をした。

## 4. 研究成果

### 4-1. カヤン諸族の概要

まず、カヤン諸族はボルネオ島内陸に暮らす稲作農耕民であり、世襲制の首長を頂点とした貴族・平民・奴隷の3社会階層を有し、首狩りや戦争に長け、周辺諸民族から恐れられる存在だった。インドネシアの東カリマンタン州(マハカム・ブラウの中~上流域)と北カリマンタン州(カヤン流域)およびマレーシアのサラワク州(バラム・バルイ流域)そしてインドネシアの西カリマンタン州(カプアス上流域)にも少数が分布している。推定人口は10~12万人ほどである。

下位言語集団としてはもともと別言語の民族であったと思われるカヤン(ブサンなども含む)バハウ(ワハウ、ングレック、メラップなども)、ガアイ(マンガイ、ロン・ワイ、ロン・グラットなども)の3つがある。カヤンとバハウの基礎語彙は多数がオーストロネシア語族のそれと共通しているが、ガアイにはモン・クメール語族の語彙や発音体系も多数混入しており、前者とは明らかに起源や島への来歴が異なることを示している。ガアイの一部は口頭伝承で、島外からやって来てカヤンやバハウより後から内陸に定着したこと、サラワクにいた時代に現ベトナムと思われる異邦へ海を渡って遠征に行った先祖がいることなどを主張している。

これら3下位言語集団はサラワク側からカヤン流域へ、さらにカヤンから現在の各カリマンタンへと数世紀かけて移動した過程で、交易・通婚などに加えて、ガアイの首長らを中心に戦争・首狩りに強い村落が他村を吸収合併することを繰り返してきた。そのため、ワハウやメラップはバハウの子孫を自認するが言語は大幅にガアイの影響を受けており、またバルイ流域の大多数のカヤンや東カリマンタンのカヤンの一部(ウマ・レカンとマテリバツ/ウマ・ラサーン)は標準カヤン語を使用するがその一部がガアイ的音韻に変化している(例: *masik*「魚(標準)」 *masiak*, *kəlawiŋ*「星(標準)」 *kəlawiəŋ*, *bawa:ŋ*「湖(標準)」 *baweaŋ*)。対照的に、まだサラワクにいた時代からロン・グラット(ガアイ)と同盟し共に東カリマンタンまで移住してきたブサン(カヤン)は、ロン・グラット村落の近隣に定着するか、ロン・グラット村内で共に暮らしてきたにもかかわらず、今日まで標準カヤン語を保持している。

### 4-2. 基礎語彙にみるインドシナ半島からの影響

このようなカヤン諸族から収集した25方言(インドネシア・マレーシアのカヤン10とバハウ8、インドネシアのガアイ7)を分析した結果、オーストロネシア語族(AN)とモン・クメー

ル語族 (MK) に広く共有される語、主に AN に類似ないし同一形がみられる語、主に MK に類似ないし同一形がある語、AN・MK とともに併用されている語、の 4 種類があることがわかった。

については、言語学研究ですでに知られている「目」(Proto-AN: \**maCa* (西部マラヨ・ポリネシア語派では \**mata*) Proto-MK: \**mat*) 「骨」(PAN: \**CuqelaN* (西部 \**tuqelaŋ*)、PMK: \**c?aaŋ*, \**c?aiŋ* など) などの例があり、インドシナ半島と島嶼部の間の頻繁な交流 (交易や移住) によるという可能性、あるいは古代に語族同士が分立する前から共有されていた語である可能性などが考えられるが、可能性が広範囲にわたり議論が困難になるためここでは踏み込まないで置く。また については、「鼻」(*uruŋ*, *uroŋ*, *guruŋ*, *guloŋ*, *gənləŋ* など。PAN は \**ujun*) 「道」(*jalan*, *ala:n*, *gula:n*, *lan*, *li:n* など。PAN \**zalan*) 「恐怖・怖い」(*takut*, *təkut*, *təkəwt*, *kut* など。PAN \**takut*) 「血」(*daha:?*, *nda:?*, *ra:?*, *la:?*, *əleha*, *lehe?* など。PAN \**daRaŋ*) などがあつた。

問題の 型語彙は、カヤン諸族全体ないし多数がモン・クメール系語彙を使っている場合と、主にガアイのみが使っている場合とに分かれる。全体的な事例の 1 つに、「蟻」(*kəbira:ŋ*, *biray*, *berila:ŋ*, *uluwəwŋ* など) が挙げられる。蟻は MK では大半の語派の祖語 \**smo:c*, \**smuuc* などが一般的で、AN のマレー語 *səmut* も同源と思われるが、カヤン諸族はニコバル語派の *kamilaŋ*、モン語派の *lāŋ* (「赤アリの巣」) パラウン語派の *brīŋ* のようなマイナー言語と同源の語を使っている。*səmut* には「噛む、刺す」という意味があるという説があるが、カヤン諸族はこの語形を「蚊」(*hamuk*, *heməwk* など。マレー語 *namuk*) に使用している。蟻と蚊はボルネオに限らず、アジア広域で人間の生活環境にもっとも密着した昆虫であり、この 2 種のセットに *-l/ra:ŋ* と *-muc/k* 型の語彙を対応させている民族が多数いると思われる (ただし蟻と蚊のどちらにどの型を対応させるかは地域による)。

ガアイ諸語はさらに方言が分かれ、それぞれが異なる MK 語に起源をもつ語彙があることもわかった。例えば、「大きい」(「偉大な、広い、年上の」など多様な文脈でも使用可) という語は、カヤンやバハウは PAN \**Raya* に由来する *aya?*, *eya*, *hiyu?* などを使うが、ガアイはロン・ワイやロン・グラットが *puən*, *puŋŋ* (カトゥ語派 *puŋŋ* などから?) マンガイとガアイ・ロン・パウが *ŋan*, *ŋen* (バナル語派 *ŋen*, *ŋun*) や *poho:ŋ*, *pahoan* (バナル語派 *bho:ŋ* 「広範囲にわたる、広い」) を使っている。他、地位の高い貴族や動物のリーダー的存在には *jo:ŋ* (バナル語派 *jəŋ* 「リーダー、大きい」 *jə:ŋ* 「大型の鹿」など) という尊称も用いる。

また興味深いことに、現在のモン・クメール語族は接辞活用を (かつてはあつた可能性があるにせよ) もたないが、カヤン諸族はモン・クメール系語彙に接頭辞をつけて形容詞や動詞を作ることがわかった。例えば、カヤンやバハウは「黒い」を AN 系の \**qitem* から来た *pita:m*, *itam*, *iəm*, *tiəm* などを使うが、ガアイは「炭」*dowŋ*, *dəwŋ*, *daŋ* (ベトナムのチャム系諸族ジャライやエデの *hedəŋ*, *hdəŋ*、クメール語派では *khju:ŋ*) などに接頭辞をつけた *mə-dowŋ*, *mə-dəwŋ*, *mə-daŋ* を使っている。

そして、両語族の語彙を併用する 型では、AN と MK の語彙が同じ事柄の異なる形状を表したり、日常語と敬語、あるいは日常語と叙事詩などの文学表現のように、異なる文脈で使い分けたりしていた (以下の表参照)。MK 系諸族は、カヤン諸族と同じように AN・MK 両方の影響を受けているインドシナ半島のチャム系諸族 (チャム、ジャライ、ラデ/エデ、ラグライなど) に長らく支配されていたため、語彙にもチャム系諸族との共通点が多くみられ、ここでも併記しておく。

語義	カヤン諸語	類似する諸言語族の語彙
「耳・ 耳たぶ」	<i>apaŋ</i> 「耳、(耳飾りのない) 耳」	[MK] <i>tapəŋ</i> , <i>apaŋ</i> , <i>ʔapəŋ</i> etc. 「聞く」 [C] <i>pāŋg</i> 「聞く」
	<i>təliŋa:n</i> 「(耳飾り付きの) 耳、耳たぶ」 <i>iliŋ</i> , <i>ilīŋ</i> 「耳」	[AN] <i>təliŋa</i> など 「耳」
「河川 ・水」	【日常語】 <i>huŋəy</i> , <i>huŋe:?</i> , <i>haŋoy</i> など	[AN] <i>suŋai</i> 「河川、水」
	【敬語】 <i>kəlaŋ</i> , <i>təla:ŋ</i> , <i>tələŋ</i> など (故郷の河川や飲食物の水)	[MK] <i>krə:ŋ</i> , <i>kronŋ</i> , <i>karu:ŋ</i> , <i>trə:ŋ</i> など 「河川」 [C] <i>kraong</i> 「河川」
「空・ 空間」	【日常語】 <i>laŋit</i> , <i>laŋet</i> , <i>ləŋayf</i> など	[AN] <i>laŋit</i> 「空、天」 [C] <i>lingik</i> 「空」
	【文学的表現】 <i>b(ə)ra:ŋ</i> 「空間」	[MK] <i>bra:ŋ</i> , <i>pray</i> , <i>pleŋ</i> など 「空間」 [C] <i>mblang</i> 「平地の空間、庭」

注： MK = モン・クメール語族 (Sidwell and Cooper 2009) AN = オーストロネシア語族 (Blust and Trussel 2020) C = チャム系諸族 (Sakaya and Shine 2014)

これらの類似例として、野生の豚すなわち猪と飼育豚の語彙セットも挙げられる。家畜に関する語彙は、インドシナ半島の \**ci:m* 「鳥」を鶏やそれ以外の家畜 (主に豚) に、そしてさらに家畜

の動作などにも広がっていったという長い歴史があったようで、よく似た多数の語彙があり複雑である。カヤン諸族では、ガアイが *dʒip, dʒup* 「鶏」と *dʒim, dʒum* 「飼い豚」、バハウが *hija:p, həjap* と *aja:m, ajam*、カヤンが *həna:p* と *utiŋ* を使っている (*utiŋ* のみ別語源で、クム語派 *chieŋ, chi:ŋ* 「豚」などから来たと思われる)。本来 MK 起源と思われるこれらの語彙セットは、クムとニコバルの 2 語派の「鶏」(*ce:p, cho:p, ŋip, ɲep, ɲine:p*) と、パナールとペアの 2 語族の「豚」(*jam, niem* など)に単独で存在するのみで、現在のインドシナには別起源の語彙が広く普及している。一方、AN にも「鶏」ないし「鳥」「家畜」に *ayam, hayam* などが入り込んでおり、インドシナがボルネオとの交易取引を通じて入ってきた文化である可能性を示している。

#### 4 - 3 . 語彙の起源に関する伝承

カヤン諸族の一部には、ごく断片的ではあるが MK 系語彙の起源について説明する言説、ないし一種の伝承が残っている。例えば、カヤン諸族は基礎語彙の中の「年老いた ('old')」(「物が)古い」のと区別するため)として *səkəw, səkeʔ, ukow, uku:* などを使い、カヤンやバハウはさらに接頭辞をつけて名詞「老人」(*huku:*) や述語 (be 動詞 + 形容詞)「年老いている」(*muku:*) としても使っている。これに関して、ロン・グラットは「この語は本来『頭が白い』という意味だったんだ。お年寄りに対して敬意を表するために、その肉体の弱さや年齢の高さではなく、髪の色を指していたんだよ」と説明する。

これをもとにデータベース調査とベトナムでのスレー (コホー) 族の村落調査を行った結果、インドシナでは本当に「(髪が)灰色の、白髪 / 銀髪の」という意味の形容詞 *sakə:, sək kə:, kə:* (パナール語派) *skaw, skəj, skəv* (クメール語派) *sənkə* (モン語派) を使っていることがわかった。なお、これらとは別系統の語形で「年老いた」という語も存在していた (唯一クメール語に「(髪が)灰色の」に形が類似する *saav kae* 「老人、オールドミス」があるが、詳細は不明)。その他の MK や AN の「白い」や「年老いた」をみると、しばしば *kara:, kra:* のような語形もある。仏教や交易の交流などと考え合わせると、結論として MK・AN 両語族はサンスクリットの「輝く、明るい、金星」(*shukla, shukra*) を借用し、一般的な「白い、明るい」と年配者の「白髪の」に対して別々の変化語形を当てたと考えられる。

以上から、カヤン諸族は過去に年配者を敬意を表しながら表す MK 系語彙を採り入れたこと、その際、*səkəw* や *səkeʔ* という語形を使うガアイが主に初期の導入者となり、カヤンやバハウにも普及したが *s-* が抜け落ちた (か *h-* に変換された?) 可能性があることが推測される。残念ながら本研究期間中には新型コロナ禍のため共同現地調査が実現できなかったが、このような語源に関する言説をさらに集めることができれば、言語の伝播過程がより明らかになるだろう。

#### 4 - 4 . その他の語彙にみる傾向

カヤン系諸族は基礎語彙以外にも多数の MK 系語彙をもっている。特にガアイのみが有しかヤンやバハウにはない語彙として、「包丁、ナイフ」(*pek, pa:yc* など) 「剣」(*kəwʔ*) 「(女性用) 帽子」(*sədəw, sədo:n*) 「指輪」(*gənməan*) 「猫、山猫」(*ŋəw, ɲiw*) のようなインドシナとの交易によってもたらされたと考えられる品物の他、「タロイモ」(*hələa*) 「マツチ」(*da:c*) 「遠い」(*dələwŋ*) 「歯」(*ku:, kiw*) のような日用品や日常語も挙げられる。このうち「包丁、ナイフ」「指輪」「猫」はパナール語派、「(女性用) 帽子」「タロイモ」はヴェト語派、「剣」「歯」はペアール (ペア) 語派、「遠い」はモン語派の語彙と非常に近い。パナール・ヴェト語派の諸民族はベトナムやチャムの帝国下にあった少数民族であり、ペアール語派の人々はカンボジアの少数民族だがクメール語に大いに影響を与えたと考えられ、ミャンマー、タイ、ラオスなどに住むモン語派も古代から王国を築いて栄えたので、カヤン系諸族がこれらの語彙を交易の便宜上借用したり、あるいはボルネオに移住・定着したりした可能性は十分に考えられる。

チャム王国の臣下であったパナールやヴェトの語彙に近い語彙群としては、貴族や戦士の昔語りや宗教歌などの口頭伝承のジャンルもある。すでに Okushima (2018) にも述べられたように、*lekan* や *təlo:y* はチャム系諸族 (Laffont 1963) やインドネシア・カンボジアなどで一般用語となっている。精霊および精霊に祈りや宗教歌を捧げる治療儀礼 *mətaw, mətə:* も、チャム系諸族の一派ラデ / エデの *m̄tāo* 「精霊、幽霊」とほぼ同じである。

宗教面では、カヤン諸族は豊穡の神の名で女性貴族名としても使われる *Yeaŋ, Yayŋ, Ya:ŋ, Uya:ŋ, Uja:ŋ* などという語をもつが、これはカトウ語派の *jaŋ* 「守護霊」*ɲaŋ, ɲa:ŋ* 「精霊」*ʔadije:ŋ* 「(死をもたらす) 主要霊」や、パナール語派の *ja:ŋ* 「精霊」*ɲaŋ* 「守護霊、神」に相当する。これらの語派は先と同様にチャム王国の臣下であり、チャム族自身も *jaŋ* と呼んでいるが、カヤン諸語の中に *Uya:ŋ, Uja:ŋ* などのバリエーションもあることから考えて、この語をボルネオ島へ直接もたらしたのはカトウ語派やパナール語派である可能性が高い。

#### 4 - 5 . 暫定的結論

以上の研究成果から、カヤン諸族は AN に分類されてきたが MK 系語彙を多数使用しており、インドシナのチャムと同様に AN・MK 両語族の特徴を併せもつ民族であることが明らかになった。ここから、最低でもカヤン諸族はインドシナ各地との交易や交流を長期にわたって行っていた可能性が示唆される。さらには、その下位言語集団の 1 つであるガアイには、交易取引を通じた語彙借用だけでなく、実際にインドシナからボルネオへ移住してきた人々も混じていた可能性がある。

特に興味深い点として、カヤン諸族が AN・MK 両語族の言葉を一部併用、ないし意味や文脈をずらして使っているという事実がある。彼らにはおそらく両語族の言語の理解が大切であるという認識があり、そのため世代を越えて語彙の併用という習慣を受け継ぎ、「年老いた」のように語源を説明する人々もいた。

もう 1 点、ガアイやバハウの「鶏」と「飼い豚」に、インドシナ半島の「鳥」を起源とする変化語形 2 種を当てているという事実は、この使い方がボルネオ独自のもので家畜の取引の中心地の 1 つであった可能性、あるいは古い時代のインドシナで使われていた語法がボルネオに残り、その他の国・地方では後から別起源の語彙が普及したという可能性を想起させる。

カヤン諸族のもつ MK 系語彙の起源から考えると、ボルネオへの来島者たちはチャム系諸族の先祖であった可能性もあるが、現時点ではバナルやヴェト、カトゥなどの MK 系先祖であった可能性の方が高い。ただし、カヤン諸族には先述のようにニコバル、ペア、クメール、クムなどの語派にみる語彙に類似した語もしばしばあり、またカヤン諸族の周辺民（ブナン、トゥンジュン、クタイ・マレーなど）の言語の中にはアスリ語派にみる語彙に近い語もある。よって、ボルネオ島にはカヤン諸族だけでなく、MK その他の多様な言語族が移住してきた可能性が高いといえる。

本研究では新型コロナ禍のため共同現地調査を実施できなかった恨みもあるため、今後の課題として継続調査を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Mika Okushima	4. 巻 51
2. 論文標題 Epics of the Ga'ay, the most hegemonic Kayanic subgroups in East and North Kalimantan (2): Their Prosperity in the Age of the Baram and Balui basins.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Borneo Research Bulletin	6. 最初と最後の頁 134-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河合文	4. 巻 7010
2. 論文標題 ドリアンと森の恵み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Daily NNAマレーシア版	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mika Okushima	4. 巻 50
2. 論文標題 Epics of the Ga'ay, the most hegemonic Kayanic subgroups in East and North Kalimantan: Biographies of chiefs in the Age of the Kayan basin.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Borneo Research Bulletin	6. 最初と最後の頁 95 189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田 晶子	4. 巻 166
2. 論文標題 情報通信技術との共生の時代における身体技法論の更新 < 共同研究 : テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究 >	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民博通信 Online = Minpaku Tsushin Online	6. 最初と最後の頁 22 ~ 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009592	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 二文字屋脩	4. 巻 46
2. 論文標題 原始豊潤社会論再考：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリにみる『豊かさ』の現代的位相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会人類学年報	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wnuk Ewelina, Ito Yuma	4. 巻 32
2. 論文標題 The heart's downward path to happiness: cross-cultural diversity in spatial metaphors of affect	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cognitive Linguistics	6. 最初と最後の頁 195 ~ 218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/cog-2020-0068	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mika Okushima	4. 巻 52
2. 論文標題 Kayan-Busang myths and epics about the origins of their old religion: Ancient deities and ancestors before the reign of Inee' Aya'/Dipuy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Borneo Research Bulletin	6. 最初と最後の頁 152-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 平田晶子
2. 発表標題 北タイ(ランナー)の伝統舞踊ージャオ・ダーラーラッサミー妃殿下の創作舞踊と生涯からー
3. 学会等名 東京外国語大学オープンアカデミー「東南アジアの音楽と芸能を知ろう～大陸部～」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田晶子
2. 発表標題 博士論文：ラオス中部ラオトゥンのラム歌唱の民族誌－グローバル状況下にみる五感統合とデジタル化をめぐる身体感覚の現在
3. 学会等名 日本文化人類学会関東地区博士論文・修士論文発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Aya Kawai
2. 発表標題 Potentiality of fieldwork data for rural development in the context of Society 5.0: A case of development planning and the Bateks in Malaysia
3. 学会等名 The International Conference on Languages and Communication, Universiti Sultan Zainal Abidin (Malaysia) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田晶子
2. 発表標題 タイの音楽と舞踊～多民族の国家統合と師への礼拝～
3. 学会等名 東京外国語大学オープンアカデミー「東南アジアの音楽と芸能を知ろう～大陸部～」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Aya Kawai
2. 発表標題 Rivers and Land Routes: Transportation, Economic Networks, and the Bateq
3. 学会等名 Anthro Seminar Series (Faculty of Applied Social Sciences, Universiti Sultan Zainal Abidin, Malaysia) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Aya Kawai
2. 発表標題 Forest Life and Village Life of the Batek of Kuala Koh: Health and Sanitary Aspect
3. 学会等名 Orang Asli Health and Well-being in the 21st Century (Keene State College, US) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 二文字屋脩
2. 発表標題 ボランティアと自己変容：少数民族の生活支援を通じた人類学的フィールド教育の可能性
3. 学会等名 第54回日本文化人類学会研究大会（分科会8「自己変容型フィールド学習に向けて」）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平田晶子（共著）（山口裕之・橋本雄一編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 292
3. 書名 地球の音楽	

1. 著者名 河合 文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 334
3. 書名 川筋の遊動民パテッ：マレー半島の熱帯林を生きる狩猟採集民（生態人類学は挑む・モノグラフ 5）	

1. 著者名 馬場淳・平田晶子・森昭子・小西公大（共編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 356
3. 書名 萌える人類学者	

1. 著者名 箕曲在弘・二文字屋脩・小西公大（共編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 人類学者たちのフィールド教育：自己変容に向けた学びのデザイン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

半島マレーシアの先住民オラン・アスリの村から日本へ：マレーシアの新型コロナ感染爆発と移動制限令 <a href="https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/9">https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/9</a>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 雄馬  (Ito Yuma)  (10795488)	横浜市立大学・都市社会文化研究科・客員研究員   (22701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河合 文  (Kawai Aya)  (30818571)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教    (12603)	
研究分担者	二文字屋 脩  (Nimonjiya Shu)  (50760857)	愛知淑徳大学・交流文化学部・准教授    (33921)	
研究分担者	平田 晶子  (Hirata Akiko)  (70769372)	東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員    (32663)	
研究分担者	新江 利彦  (Shine Toshihiko)  (60418671)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員    (12603)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中野 惟文  (Nakano Korefumi)	東北大学文学研究科・大学院博士課程・大学院生	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------